

『梁塵秘抄2021 cirque de kyoto』

Classic Literature x Traditional Arts x New Technology Ryojinhisho 2021 Cirque de Kyoto

≫開催概要

開 催 日:3月27日(土) 11:00～、15:00～(2回公演)
※体験ワークショップ 13:20～14:00
会 場:ロームシアター京都 ローム・スクエア
参加対象:どなたでも
料 金:無料
申 込:不要
参加人数:4,928人(11:00の回 2,592人、15:00の回 2,336人)

脚本・演出:高橋 浩
演出助手:小笠原 彩乃
古典芸能監修:小笠原 由禰
サーカス監修:QUMIKO
演 奏:山本 恭司(特別出演)、稲葉 明德、三原 智行、
ワタンベ、遠山 貴志、イガキアキコ
出 演:小笠原 由禰、クロワッサンサーカス(清水 ヒサヲ、とつ、ケンタ、吉川 健斗)
音 響:武田 雅典
衣 装:落 里美、森本 智子
音 楽:三原 智行、稲葉 明德、山本 恭司
舞台監督:伊藤 薫
制 作:山本 信之、緒方 辰之介
企画・運営 株式会社井筒企画
協 力:井筒グループ、京都府神社庁、大田神社

≫プログラム概要

現代につながる大衆芸能のルーツである「猿楽」の高いエンターテインメント性を活かした、京都ならではの現代的な芸能「CIRQUE de KYOTO(京都のサーカス)」の創作を通じて、平安時代から京都の人々が担ってきた文化創成のプロセスそのものの具現化に取り組むプログラム。平安時代に後白河法皇が編纂した『梁塵秘抄』をモチーフとした叙情的なストーリーを背景に、当時の装束等を随所に配置し、様々なサーカスで構成する京都らしさにあふれる作品を制作。今年度は、2021年度の本公演に向けワークインプログレス公演を実施しました。

≫Project Outline

This project engaged in actualizing the very process of creating culture, which the people of Kyoto have been undertaking since the Heian period a thousand years ago. Through producing the distinctively Kyoto style of modern performance, Cirque de Kyoto utilized the high entertainment qualities of *sarugaku*, a traditional theater form to which Japanese popular performing arts continuing today trace their roots. Against a backdrop of a lyrical story inspired by the *Ryojinhisho*, an anthology of Japanese poems compiled by Emperor Go-Shirakawa during the Heian period, this performance of various circus acts brings out Kyoto's characteristics by emphasizing the costumes of the time. In 2021, a performance presented as a work-in-progress workshop ahead of the full version in 2022.

≫梁塵秘抄とは

『梁塵秘抄』は、平安時代末期の治承年間(1180年前後)に、後白河法皇が編者となって編まれた今様歌謡の集成で、歌謡集10巻と口伝集10巻から成っていたと推定されています。今様とはその当時における「流行歌」のことで、後白河法皇は少年の頃から今様を好み、歌の上手を召し出して唄わせ、自身も傀儡子や遊女で伝承の確かな者について今様を習うなどして、多くの歌謡を知ることになりますが、自らの死後、それらが伝わらなくなることを惜しみ、『梁塵秘抄』として編纂したものと考えられています。書名の「梁塵」は、名人の歌で梁の塵も動いたという故事によるもので、優れた歌声や歌謡の事を指します。

≫協力内容について

井筒グループ/株式会社Izutsu Mother

井筒は、1705年の創業以来300年以上に亘り、仏教や神道の宗教儀式で用いられる伝統的な装束や、宗教関係用品の製造・販売を行ってきました。現在は、商品の販売・レンタル、コンサルティングやプロデュースなど、事業領域を多方面に拡大。取り扱い商品も、古典的美術工芸品や博物館の展示物、映画、演劇への衣裳提供など多岐にわたっています。この度のパフォーマンスの創成にあたり、平安末期に猿楽者や後白河天皇が身に付けていたと思われる様々な装束や出演者の衣裳、美術小道具として使用する供物台等をご提供いただきました。

大田神社巫女神楽保存会

賀茂別雷神社(賀茂神社)の境外摂社の一つである大田神社の巫女神楽は、地元で「チャンボン神楽」と称され、毎月10日夜の他、元旦、節分、2月24日のさんやれの際に行われています。神楽を奉仕するのは大田神社の刀祢の家に限られ、銅拍子、鼓、紋太鼓の奏者と巫女の4人で構成されており、太田神社が長寿の神を祀ることから、老人により囃し舞われる日本最古の形を残した神楽ともいわれています。今回のクリエーションでは、京都府神社庁、大田神社、大田神社巫女神楽保存会にご協力を仰ぎ、チャンボン神楽の舞を作品の中に登場する傀儡子巫女の舞に取り入れさせていただきました。また神楽で奏でられるリズムは、今回の楽曲に反映され、単調な中にも深みのあるものとなりました。

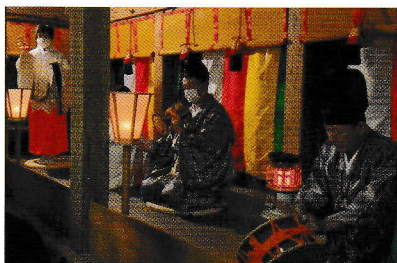
≫ 作品について(脚本・演出の視点から)

古典文学のモチーフを『梁塵秘抄』にしたのはかなり直観的な思いつきからでした。2年間に亘り、『新猿楽記』を通じて、京の民衆が熱狂した「猿楽」という芸能と、それを支えた芸能集団・傀儡子と向き合ってきました。文化の創成には「芸」を創造する「創り手」と、それを評価する「担い手」が必要で、1000年に及ぶ京の文化創成のプロセスが、この『新猿楽記』を読み解く中に垣間見えてくると考えたからです。しかし、芸能者と民衆との相関関係のみに拘泥しては一面のみの誹りを免れません。『梁塵秘抄』は、天皇自身が、和歌ではなく今様を編纂したという1点に直観的な興味がわきました。その直感が、後白河天皇という稀代の文化人との出会いを果たすきっかけとなりました。後白河天皇ほど毀誉褒貶の激しい人物も日本の歴史上稀でしょう。今回、私は世間一般で評される様々な後白河天皇像を一旦わきに置き、その事績のみを丹念に洗い出してみました。すると、一般的な感性からは支離滅裂に見える行動が、彼自身の中にあるゆるぎないルールに沿っていたのではないかと考えるに至りました。彼は文化を統べるものが政治を統べる、ということに第一義を置き、文化の創成と継承には多様性が不可欠であることを知っていたのではないのでしょうか。それは、弱者や虐げられてきた者たちに向けられた後白河の徹底した慈愛の目線、そして祈りに見ることができます。愛と祈りこそ、天皇という存在の本質的な意味ではないのでしょうか。2021年度のフィナーレに向け、この文化史上の巨人と出会えたことが、今作品のクリエイションにとって何よりの僥倖でした。

「梁塵秘抄2021 cirque de kyoto」脚本・演出
演劇プロデューサー・演出家
高橋 浩



大田神社への取材の様子

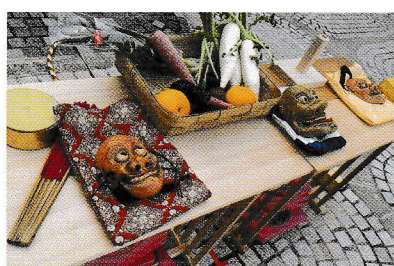


チャンボン神楽

≫ 作品について(芸能監修・出演の視点から)

昨年初頭から続くコロナ禍は、私たち芸能者にとっても大変な苦難を強いられることとなりました。昨年3月のクリエイションが終了した後、実に6か月にわたって全ての公演がキャンセルとなり、演じる機会を失っただけでなく、稽古もままならない状況が続きました。しかし、考えようによっては、普段は忙しさの中で取り紛れている創作のアイデアを、じっくりと練るにはまたとない機会でもありましたので、かねてから手ずさび程度に行っていた面打ちに取組み、40面ほどを制作することができました。能は面をつけて演じ、狂言は面をつけないものと思っておられる方が多いのですが、実は狂言にも面をつけて演じる曲があります。今回のクリエイションでは、高橋氏に自作の面をご覧いただいたところ、気に入っていただき、作品に登場するクロワッサンサーカスの皆さんが演じる猿楽者に、面をつけてパフォーマンスを行っていただくことになりました。様々な散楽・猿楽のわが国最古の図解集である『信西古楽図』にも、仮面をつけた猿楽が記されており、その再現に取り組んでみたいと考えていた折から、大変有意義な取組みとなりました。実際に仮面をつけると視野が狭くなり、普段通りのパフォーマンスの感覚をつかむのに一苦労がありましたが、やっていくうちに、素顔で演じるよりも、「何者かになりきって演じる」という感覚が研ぎ澄まされてきて、古代に京の民衆が熱狂した「猿楽」の本質的な姿に近づくことができたのではないかと考えています。また今回は、私の娘で、阿闍梨の資格を持つ小笠原彩乃がパフォーマンスの中で声明を披露しました。当初予定にはなかったのですが、『梁塵秘抄』に採録された今様の大半に仏教的な題材が共通することや、後白河自身が声明の大家でもあり、おそらく声明系統の特色が豊かだったのであろうことを鑑み、楽曲に声明を取り入れることになりました。

「梁塵秘抄2021 cirque de kyoto」芸能監修・出演
和泉流狂言師
小笠原 由祠



作中で使用した面(作:小笠原 由祠)

≫ クリエーションについて

『新猿楽記』の解釈を通じて、「猿楽」という芸能に込められた京都独自の文化創成のプロセスとその意味を「新猿楽記 ～cirque de kyoto～」として結実させた2か年に亘るプログラムの成果をベースに、京都の民衆がたどってきた文化創成のプロセスそのものを具現化し、新たな文化を未来へ向けて創造していく試みとして、“京都のサーカス”「CIRQUE de KYOTO」の旗揚げを見据えたエンターテインメント創成プロジェクトが、2020年4月に開始されました。作品は、「京都ならではのサーカス」の創成を目指す試みとして、古典文学等をモチーフに、京都で連続と受け継がれてきた民俗芸能や伝統工芸など、「京都ならではの」の文化的資源を活用し、京都らしさにあふれる叙情的なストーリーを背景に、空中ブランコや綱渡り、エアリアル、ジャグリングといった様々なサーカスの演目で構成することが確認され、脚本・演出の高橋浩は、古典文学のモチーフとして、後白河法皇が編纂した今様歌謡の集成『梁塵秘抄』を取り上げました。これにより、白拍子や遊女、傀儡子など、遠く散楽にルーツを持つ平安時代の芸能者たちが、作っては口伝で残されてきた歌に込められた不思議な魅力をモチーフに、「京都のサーカス」の背景に流れる叙情的な風景を、当時の衣装や小道具を用いて構成することになりました。また京都の伝統民俗芸能として大田神社のチャンボン神楽とのコラボレーションにより、傀儡子や白拍子が行ってきた原初的神楽の形態を検証し、パフォーマンスへの導入を検討することになりました。

約半年にわたって編者である後白河天皇に関する様々な文献、事物の研究を重ね、2020年12月にプロットとなる準備第1稿が完成。『梁塵秘抄』が今様の集成であることから、『梁塵秘抄』に記された今様を意訳的な現代語訳の歌詞に作詞なおし、ブルースの曲調による新たな楽曲3曲の制作を、特別出演の山本恭司に依頼しました。2021年1月

には、上賀茂の大田神社に赴き、「チャンボン神楽」を取材。単調な舞とリズムで奏でられる、最も古い形態の神楽を作品の中に取り込むことを了承していただき、舞はパフォーマンスの中で行われる猿楽者の中の傀儡子巫女の舞に、リズムや音源は稲葉明憲と三原智行、イガキアキコ、ワタンベ、遠山貴士で構成される「新猿楽バンド」に提供され、今作品の楽曲に使用されました。山本恭司が作詞した新曲の歌詞を取り入れた準備第2稿を基に、2月18日・19日の2日間、高橋浩、古典芸能監修の小笠原由詞、サーカス監修のQUMIKOとクロワッサンサーカスの清水ヒサヲ、とつ、ケンタ、吉川健斗による稽古を奈良県葛城市の葛城市公民館小ホールで敢行。この折に小笠原由詞が自作した面をつけて、「仮面猿楽」の創成に向けたクリエイションが行われました。また、3月初旬には山本恭司、稲葉明憲、新猿楽バンドそれぞれが担当する楽曲の音源が完成し、作品を構成する基本的なパーツがすべて整いました。今回の作品における最大の特徴は後白河天皇を演じる小笠原由詞のモノローグにあります。2月から3月にかけて延べ6回にわたり、高橋浩と小笠原由詞による稽古を重ねられ、本番の前日となる3月26日のゲネプロによって最終の確認が行われ、翌日の本番を迎えることになりました。27日の本番当日は好天に恵まれ、当初の予測を大幅に上回る約5,000人の観客がパフォーマンス会場となったローム・スクエアを埋め尽くし、非常に高い評価を頂いたものと確信しております。

「梁塵秘抄2021 cirque de kyoto」制作
プランナー
緒方 辰之介



》作品内容詳細

本作品の台本には明確に分けられたチャプターはなく、約50分に亘るパフォーマンスは、主演である後白河天皇の心象の、流れるような描写で構成されています。しかしここでは作品内容をわかりやすくするために、あえてチャプターに分けて解説いたします。

Scene1 イン트로ダクション

僧侶が恭しく仮面を供物台へと奉げ、筆簀が柔らかくイベント会場を包み込むように鳴りひびき、舞台が整う。そこへ『梁塵秘抄』の有名な今様のフレーズ“遊びをせんや生まれけむ”を、ブルースにアレンジした山本恭司がソロで歌い上げる。再び筆簀が鳴き、世界が変わる。山本恭司の楽曲に誘われたかのように後白河天皇が登場し、歌詞に込められた想いを吐露する。

Scene2 モノローグ

客席の奥では、猿楽者たちのパフォーマンスが、遠い風景のように行われている。しめやかなサーカスマュージックを背景に後白河天皇が、今様に傾倒し、耽溺していく心情を吐露する。

Scene3 後白河 愛と祈り

後白河天皇の独白。自らの身の上を語る中で、天皇という地位や立場を超えて、今様に表れる、苦しむ民衆の心に愛と祈りをささげてきた後白河天皇の心情が語られる。音楽がフェードアウトしていく中、『梁塵秘抄』に選された、男女の愛と心のあり様を現した普遍的な今様のフレーズを口ずさむ。

“我を頼めて来ぬ男 角三つ生ひたる鬼になれ さて人に疎まれよ霜雪霰降る水田の鳥となれ さて足冷たかれ 池の浮草となりねかしと揺りかう揺り揺られ歩け”

Scene4 ブルース そして猿楽

“我を頼めて来ぬ男…”を山本恭司が現代風に意識したブルースが、彼によって奏でられ、歌い上げられる。ブルースに感応した後白河天皇は、観客席でパフォーマンスに興じる子飼の猿楽者を傍に呼び寄せ、自ら翁の面をつけて謡い、舞い始める。やがて興が乗った後白河天皇は、猿楽者たちにそれぞれが得意とする芸を披露させる。

賑やかなサーカスパフォーマンスによる“猿楽パーティー”が始まる。

Scene5 エンディング

民衆が熱狂した「猿楽」「今様」そして祈りこそ、自分の心の奥に無限に広がる闇に光を当てたこと、そして民衆の熱狂の中に花開く芸能・文化の創造こそが長い歴史の中で、京だけが育んだ高度な政治性であることが、後白河天皇から語られ、山本恭司の楽曲「Prayers」の独奏でエンディングを迎える。

「梁塵秘抄2021 cirque de kyoto」制作

プランナー

緒方 辰之介



上演・体験ワークショップの様子